

被災者にわれはあらぬを 大口玲子

東日本大震災から三年が過ぎた。近刊歌集の中で東日本大震災と原発事故がどのように歌われているか、関心を持つて読んでいた。今年三月に刊行された小島ゆかりの歌集『泥と青葉』では、次のような作品が印象深かった。

- ・その直後わらわらとみな外に出てまだ知らざりき本当のことを
- ・その夜更けまた救急車の音はして見知らぬ時間迫り来るなり
- ・被災者にわれはあらぬを隈ぐまに泥水たまりからだ重たし
- ・せみのこゑ金銀に鳴り毎時〇・〇六マイクロ・シーベルトなり
- ・二人子を亡くした母がわたしならいりません辯とかいりません情報に拠らず、ひたすら「知らない」「わからない」自分を根拠に震災を歌っている。一首目と二首目で歌われているのは、地震発生直後、ニュースの言葉や映像が届いていない時点での、まつさらな自分の体験そのものである。不安や混乱、先の見えない心細さを知識や修辞で加工せず、当時の「わからなさ」をそのまま読者につきつける。また、「見知らぬ時間迫り来るなり」には言いやうのない緊張感がみなぎっている。三年を経て多くの問題が解決しないままの現在、この「見知らぬ時間」が今なお続いていることを痛感する。三首目の率直な自己規定、四首目の唐突な放射線量も、この「わからなさ」を前面に押し出した表現である。東京在住の小島がわざわざ「被災者にわれはあらぬを」と述べる時、震災についての「わからなさ」や震災との距離感が鮮明にな

る。五首目は、震災後に氾濫した安易な言葉を、子を失った母親になりかわって全力で拒否する。「とか」という若者が断定を避けて乱用する助詞が、「辯」の怪しさをまつすぐに突いている。澤村齊美的歌集『galley』は、新聞社で校閲記者として働く個人の現場に震災が刻印した影を丁寧に歌う。

並ぶ夏

死者の数を知りて死体を知らぬ日々ガラスの内で校正つづく新聞の見出しや紙面レイアウトの機微に執した作品は、震災のニュースを相対化し、新聞紙上で伝えられることのない、震災後の閉塞感やぎくしゃくした空気をじわりとあぶり出す。震災を自らの生業に引きつけつつ「死体を知らぬ日々」と認識する態度が、この作者にしか詠めない作品の個性を引き出しているのだと思う。

昨年來高い評価を受けている藤島秀憲の歌集『すずめ』には、それとわからないようなさりげなさで歌われた震災の歌がある。単1がなし水がなし妻梨の花は咲けども納豆がなし
・東京電力をお気に入りから削除して紐ひっぱれば灯りがともるふくふくと暖色系の雨が降る八重を一重を咲くやまぶきに物資の不足、電気を使う生活、どこか不気味な雨に、震災後の日常が見え隠れする。ことさらに深刻ぶらず、一冊を貫く独特の軽妙さと淡々とした歌い口が震災にも全くぶれない点に注目した。被災地から離れた所で詠まれたこれらの作品は、震災のある一面を的確に表現し、現代短歌の奥行きを広げている。